スリランカ南部デニヤヤ
有機農業ボランティアツアー 2018
旅の感想文

現地プログラム企画： 特定非営利活動法人 パルシック

旅行企画・実施： 株式会社 風の旅行社

受託販売： 株式会社 ピースイン・ツアー

【ボランティアスタディツアー概要】

日程　　：2019 年 3 月 16 日(土)～3 月 24 日(日)　8 泊 9 日

訪問地　　：スリランカ南部マータラ県デニヤヤ　(コロンボより車で 4 - 5 時間移動)

ツアー企画　：特定非営利活動団体法人 パルシック

参加者　　：6 名

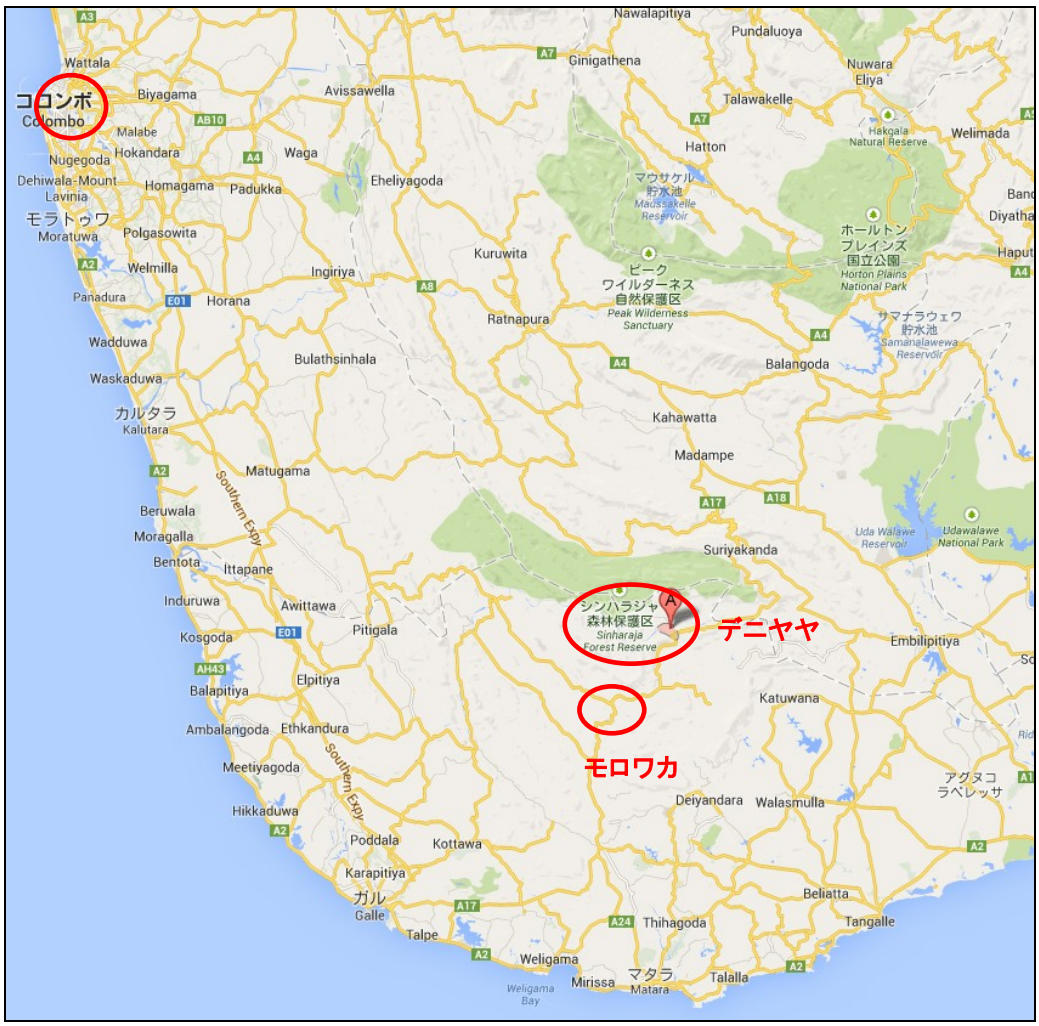
同行スタッフ：ロバーツ圭子（東京事務所）　下里真以（デニヤヤインターン）

目的　　：パルシックは 2011 年よりスリランカ・デニヤヤ地区の森林保護区に隣接する地域で、小規模農家が有機栽培への転換を応援している。日本からの参加者が、紅茶農家へホームステイし、農業ボランティアに参加することで美味しい紅茶ができるまでを知り、学び、体験する。

※SDGs(持続可能な開発目標)への取り組みとして、以下 2 つを考察する。

12. つくる責任つかう責任（産地の取り組みを知り、フェアトレードを考える）

15. 陸の豊かさも守ろう（持続可能な農業、生物多様性を守る）



行程表

日付(曜日)	時間	プログラム	宿泊地
3 月 16 日(土)	9:00	成田空港集合	コロンボ Grand Oriental Hotel
	11:20	成田発(UL455 便 ターミナル 2)	
	17:50	コロンボ着	
	20:00	ホテルチェックイン後レストランで夕食	
3 月 17 日(日)	午前	コロンボ発 車にてデニヤヤへ移動	デニヤヤ (ホームステイ)
	午後	村の散策(有機茶畑、椰子蜜採取の見学)	
	夕刻	ホームステイ先へ移動、農家宅で夕食	
3 月 18 日(月)	終日	ボランティア活動(茶摘み体験、苗木植付け、コンポスト施肥)	デニヤヤ (ホームステイ)
	夕刻	農家宅で料理セミナー	
3 月 19 日(火)	終日	ボランティア活動(コンポストセンター牛の世話・草刈り)	デニヤヤ (ホームステイ)
	午後	エクサメンバーとミーティング	
	夕刻	アーユルヴェーダセミナー 農家宅で夕食	
3 月 20 日(水)	午前	シンハラージャ森林散策	デニヤヤ (ホームステイ)
	午後	自由時間	
	夕刻	ポヤのボーディプージャー(村のお寺に参拝) 農家宅で夕食	
3 月 21 日(木)	午前	ボランティア活動(コンポスト配達、茶葉回収)	モロワカ (バンガロー)
	午後	モロワカへ移動、生物多様性の畑見学	
3 月 22 日(金)	午前	ニルミニ有機紅茶加工場見学	コロンボ Grand Oriental Hotel
	昼	ニルミニで昼食	
	午後	コロンボへ移動	
	夕食	コロンボのレストラン	
3 月 23 日(土)	終日	コロンボ市内散策(ファーマーズマーケット、寺院など) 自由行動も可能	機中泊 (Grand Oriental Hotel を16時までキープ)
	15:00	ホテルで小休憩	
	15:50	空港に向けて出発	
	16:50	チェックイン	
	19:50	コロンボ発 UL454 便	
3 月 24 日(日)	7:30	成田空港着	

へっぴり腰の連帯

杉本恵二

　スリランカで有機紅茶の栽培はまだ主流ではない事を知った。手間がかかるのだ。でも世界の消費者が求めれば付加価値は上がる。農民の収入も増える。有機農法に切り替える農民も増える。だから応援したい。

　今回のツアーでは、参加者の仲間とともに、草取り、苗木植え、茶葉の摘み取り、牛糞の堆肥作りを体験した。農業体験のない都会人がほとんど。でも持続可能な世界を願う“つわもの”。その“へっぴり腰”の連帯にスリランカの農民たちも笑う。

　地球は家族であると私は実感した。

デニヤヤの人々の生活と有機栽培農業の地域活動に触れて

高橋迪子

ボランティアスタディツアーへ参加を決めたにあたり、スリランカで有機紅茶を生産するルフナ地区の小規模茶園農家の取り組みを実際に視察してみたいと思ったこと、もう一点はスリランカでこれまで訪れたことのない南部の森林保護区に隣接する自然環境と文化、そしてデニヤヤの人々の生活に触れることで何か新たなスリランカの魅力に出会いたい、と期待を抱き参加した。

（１）農業ボランティア活動

今回、小規模茶園農家での有機紅茶栽培と製造工場を視察し、有機栽培への転換と土壌環境を保つための茶園運営管理がたいへん重労働であること、また各茶園農家により日当たりや土壌環境、堆肥の提供頻度による茶樹の生育環境も違い、生葉の品質差が生じていること、さらに肥料や農薬に頼らない有機栽培は、量産が難しい現状を実際の農作業体験を通してあらためて実感した。有機栽培は時間と作業量が多く、私たちがボランティアを行った作業だけでも、茶園草取り、苗木の植付け、牛糞を利用した堆肥による茶樹生育補助など、これまでもデニヤヤ地域農家の皆さんと協力し合い、またエクサやパルシックの支援によりコンポスト設置管理や生葉収集などのサポートにより現在の有機生産体制を支援して構築できていることが理解できた。

そして小規模茶園農家では単独の家族運営がほとんどで、家族の中には夫婦で別の仕事を選択し出稼ぎに行かなければならない経済環境も見受けられ、高年齢な母と娘の 2 人だけで茶園を管理し持続的に生産していくには、有機農業や栽培の技術や生葉収集を地域として連携しサポートできる体制や、これから若い人材が農作業へ参入することが必要不可欠である事実もみえた。

お世話になった茶園農家でご馳走になった有機紅茶は、深い濃赤色の水色でミルクティーにも映え、しっかりしたコク味と砂糖を焦がしたような甘い香りの美味しい紅茶をいただき、改めてこれだけ手をかけた栽培や生産がされている紅茶を、私たちがいただいている恵みと豊かさを現地で感じることができた。

（２）これからのスリランカ紅茶へ、わたしに何ができるだろうか。

スリランカへの訪問は、わたし自身も紅茶調達の仕事を通して数回ほど経験があった。一企業の役割として日々の仕事の中で、日本のみなさんに嗜好品としての紅茶を通しておいしさや豊かさをお届けしていくこと、そして同時に紅茶主要原産国のひとつとしてセイロンティー輸出産業の振興の役割のほんの一部として寄与できればと、漠然と個人的な思いを抱いていた。

今回ボランティアツアーへ参加することで、初めてスリランカの小規模茶園農家を取り巻く地域とその紅茶生産環境に触れることは大変興味深く、あらためて学び考えさせられる機会となった。

これまで消費国である日本として輸入者企業の側面からビジネスを通じ、スリランカにおける大規模茶園による生産体制による表面的な紅茶産業の一部しか見えていなかったこと、わたし自身も理解できていなかったことに改めて気が付かされた。

少し紅茶の専門的な話となるが、150 年におよぶセイロンティーの歴史と現在もなおスリランカにおける紅茶輸出産業は、同国経済発展の柱としての重要な役割と影響を与えてきた。スリランカ政府が組織的な体制を整え、新たな労働を生み出し、民間企業がかかわることでさらに持続的かつ効率的で量産可能な仕組みが構築されてきた背景がある。それが主にスリランカ中央山岳地帯に広がり運営管理されている大規模茶園（約 400 茶園ほど/24 運営会社）であり、産業発展の目的により推進されてきた紅茶生産体制である。

そこでは日本と同じような政府機関の農業試験場などから推奨された肥料と農薬を使用管理し、企業の茶園運営組織のもと山岳地域に生活するタミルの人々へ労働環境を提供し、生産性の向上と安定的な品質を保持・供給できる農業システムを構築し、毎週 6 千トンに及ぶ生産量がコロンボオークションを通じ世界各地の消費国へ輸出されている。その大規模茶園の生産体制の基盤こそが、同国の紅茶輸出産業として発展をしてきた背景として個人的に理解をしていた。

それは本当の意味でスリランカの、その地域に生活する人々とって将来的に持続的でかつ

社会で循環する農業の仕組みができているのだろうか、その表面的な大規模茶園運営による産業発展の裏には、失われてきたスリランカの自然環境を守り、共存していくためにスリランカ各地域の人々の声があることを、デニヤヤで有機栽培に関わる農家皆さんの生活、活動や取組から垣間見え、この滞在中に複雑な思いを抱きながら自問自答し“わたしに何ができるのだろうか”と考え続けていたことを覚えている。

デニヤヤでの有機農業の転換への取組と同じく、有機紅茶栽培に時間をかけた管理のもと生産できる環境はスリランカ国内でも未だ限られており、小規模茶園運営（全土で約 200 茶園ほど）としても一部の取組である。農家では製茶までの設備を有することは難しく、地域の製茶工場へ持ち込まれ、地域協力を無くしては難しい紅茶生産体制だろう。デニヤヤの農家の皆さんの中でも保有する茶園の一部範囲だけを有機栽培に改植している実情もあり、同国内市場および消費国からも有機紅茶の価値は未だ低いように見受けられ、農家の皆さんへ還元されるバランスが難しい点もインタビューを通じて感じられた。

スリランカ国内には 13 の国立公園と 100 を超える自然保護区があり様々な動植物を保護しておりこの恵まれた環境で育まれる動植物の多様性は世界に類がないと思う。そこで生活する人々がどう自然環境と共存していくか、そして持続的な農業体制を構築していくか、有機農業への転換や取組は将来のスリランカが残していくべきひとつの姿でないかとわたしも考える。

この自然環境、気候、森林、川、水、畑、土、生物、栽培、生育、生産よりできる農産物そのものに価値が生まれ、恩恵を受けている私たち消費者自身も価値をあらためて理解し原産国へ返還していく、その循環する農業サイクルの取組のひとつがフェアトレードでもあり、地球環境においてその選択も環境と共に生きる私たちの共存していく姿なのだろう。

少しでも多くの人がそれに気づき意識し、自ら声を上げ何か行動しようとする積み重ねが、自然環境を守り共存していく社会における持続性に繋がるのではないか。私たちは、遠い日本から何が自分にできるだろうかと改めて考え、今回のボランティアを通してデニヤヤのル

フナ産有機紅茶の価値をさらに理解することで、農家の皆さんへ還元されるようパルシックやエクサの支援活動を応援していきたいと思った。そしてデニヤヤにおける民際協力活動の取組により、将来自立した組織として継続した活動ができることを、同じような地域活動がスリランカにそして世界へ広がることを願うばかりである。

現代の日本の資本主義社会の中でビジネスをしてきた私たちにとっては、産業発展により経済が豊かになっていくとともに、恵まれてきた自然環境にも変化が起きていることすら、気が付かずに生活しているかもしれない。日本は成熟した経済環境の中で、生活環境や自然環境ともに共存できているのだろうか。スリランカは植民地時代を経て、多民族国家として独自の文化と多様性生物の環境における現在の紅茶産業として、前述の大規模茶園運営を支える産業基盤と多くの労働力、そして小規模農家を支える地域や農業環境の仕組みの両面が共存している。その先の将来の紅茶産業へ、さて、これから原産国と消費国にとって持続的でかつ共存できる環境づくりへ、地域そして人々にとっての豊かさを求めへスリランカがどう舵をきっていくのか注目したい。

最後に、現地でお世話になったホームステイ先のサラットさんご家族、エクサのメンバーとボランティア活動を通じて交流した農家の皆さん、今回ツアーの現地コーディネーターとしてシンハラ語でサポートしてくれた下里さん、コロンボでの市内散策とスリランカ滞在生活を教えていただいた伊藤さん、旅程全てのアテンドと通訳サポートを頂いたロバーツさん、そしてこのツアーへ一緒に参加した各分野のスペシャリストとして活躍いただいた皆様、スリランカでのすべての人々との出会いと体験は、毎日新たな感動の連続でわたしの貴重な経験として財産になりました、感謝しております。

時代と共に変化していく社会の中で、それぞれの当事者が対等な立場で“わたしに何ができるだろうか”と模索して道を探していくこと、わたしも社会のひとりとして、事実から目を背けてしまうことがないように、「なぜ」と考えることから「どうして」と言う理由を知り「何が」幸いであるのか、共存する社会の中で議論し考えていきたい。
将来残していく未来のために、次の世代のために。

スリランカ・ツアーに参加して

藤木秀朗

普段、何気なく愛飲していた有機アールグレイ紅茶だが、それがどこでどのように生産され、どのような経路で日本にまで届けられているのか想像したことは一度もなかったし、正直パルシックについても何も知らなかった。そんな折、紅茶のパッケージとともに届いたという「スリランカ南部 有機農業ボランティアツアー」と題したチラシを妻に見せられ、おもしろそうだとからということで一緒に参加することにした。自分たちだけではなかなか行けない場所に連れて行ってもらって貴重な体験ができそうだというのが一番の動機だったが、実際行ってみると期待以上にいろいろなことを考えさせられて、とても充実した旅行になった。

考えさせられたことをひとことで言い表せば、「グローバルなつながり」ということになるだろうか。少々抽象的になるが、思ったことを３つに分けて記してみたい。

１つは、生産者と消費者の関係についてである。よく言われるように、グローバル化とともに、あらゆる商品の生産、流通、消費が、世界規模で、互いに顔を合わすことのない分業体制で行われるようになり、それが当たり前になってきた。私たちは普段、その商品がどこで誰によってどのように作られ配給されているのかについて意識することなく消費している。そうした分業体制は、利潤の追求と生産性の向上に最大の価値が置かれているので、それさえ達成できれば、生産者と消費者が互いを知る必要はないと考えられている。だから、たとえその生産･流通過程で豊かな国の企業が貧しい国の人々を安い賃金で雇って利益を上げていようとも、消費者にとってはその商品に満足さえすれば、そうした「不当な」関係などどうでもよいことになってしまう。生産者側にしても、そうした「顔の見えない関係」を前提としている以上、効率よく利益を上げることが何よりも重要であり、消費者の健康は二の次になるだろう。

今回のツアーでは、フェアトレードを推し進めようとしているパルシックが、まさにこうしたツアーを通して、そうした分業体制とは異なる「グローバルなつながり」を築こうとしていることが実感できた。とくに強く思ったのは、手間のかかる有機農業は、分業体制とは異なる、新しい形の「グローバルなつながり」がなければ成り立たないだろうということだ。スリランカ国内での有機紅茶の需要は著しく小さいので、「地産地消」は難しいと聞いた。であれば、国境を超えた生産者と消費者の間に、分業にとどまらない関係を、直接的なコミュニケーションを通じて築いていくことが何よりも大切だろう。今回のツアーは、4 日間の滞在に過ぎなかったとはいえ、そうしたことを身をもって感じることができたという点で、貴重な機会となった。

このことにとも関連して、「グローバルなつながり」に関して考えさせられたもう１つのことは、異文化交流である。今回のツアーでは、ご夫婦２人とお子様３人の５人家族の家にホームステイをさせていただいた。そこでとてもよかったのは、日本とスリランカといった、それぞれの国を背負ったような国際交流ではなく、ごく日常的な個人レベルで生活をともにしながら、訪問先の皆さんと、生活習慣上のさまざまな違いを認識すると同時に、お互いの気持ちを通わせるようなつきあいができたということである。仏教への敬虔な信仰心、（いきなり跪かれてびっくりするほど）年長者を敬うようにしつけられた子どもたちの態度、家庭の外と内に分かれた夫婦の役割分担、洗濯機などの家電に頼らない生活、学校が大好きだという学ぶ喜びに満ちた子どもたち、毎日が手作りのスリランカ家庭料理. . . 。それらが良いか悪いかは別にして、そうした暮らしぶりのさまざまな側面に触れることで、私自身、自らの普段の生活を見つめ直すことができた。また、片言の英語でしか会話ができないにもかかわらず（もしかしたら、だからこそ）、互いの言葉を教え合ったり、食事をともにしたり、一緒に料理したり、笑い合ったりする中で、人の温かさを実感することができた。それは異文化理解というより、生活をともにすることを通じて生まれてくる喜びであり、人間関係のあり方そのものを考えさせられるものでもあった。（帰国してからその家族に写真を送ったら、その返事には、もう私たちは家族であり友人だから、今度うちに泊まるときはお金はもらわないとまで書かれてあった。）

「グローバルなつながり」ということに関して考えさせられた最後の１つは、エコロジーである。デニヤヤでのホームステイ、紅茶の有機農業のお手伝い、エクサの人々との意見交換、ニルミニの有機紅茶の加工工場見学、モロワカのバンガローの有機農園の見学. . . 。今回のツアーでは、これらの活動を通して、効率性や便利さへの偏重、生産性と利潤追求の重視、廃棄物への無関心、経済的・政治的に不当な関係を伴うグローバル化といった「近代的な価値観」がどれほど地球環境にとって害悪かということを考えずにはいられなくなった。とはいえ、いうまでもなく、「近代」以前に戻ろうというのも非現実的である。ではどうすればよいのか。上記の２つのこと―生産者と消費者の関係と、異文化交流―とも合わせて改めて思ったのは、今後、地球環境を持続可能にしていくためには、「近代」とは違う新しい価値の創造と新しい関係づくりの場をさまざまな形で作っていくことが不可欠だということである。エクサのメンバーとの会合では、苦労の多い割には収入になかなかつながらないといった有機農業の苦労話が聞かれた。おそらく、そうした本音も含め率直な意見を交換し議論できるような機会をもっともっと増やし、同時に、触れ合いの楽しさの感覚や肯定的な感情的つながりを強めていくことが、生産者と消費者の相互のモチベーションになるし、それがひいては環境の保全にもつながってくるではないかと思った。その意味で、生産性や効率といった原則だけでは計れない有機農業は、分業体制とは異なる、新しい「グローバルなつながり」を築き、持続可能な環境作りへと転換する上で核心的な事業ではないかと感じた。

このように思いがけず参加したこのツアーをきっかけに、自分も、新しい形の「グローバルなつながり」を広げるために、できるかぎりの貢献をしていきたいと考えるようになり、これまでに身につけた自分のスキルをどう活かせるだろうかと思案するようになっている今日この頃である。

スリランカボランティアツアー感想

藤木ますみ

アーユーボワン！（シンハラ語で、こんにちは）

「スリランカ有機農業ボランティアツアー」は、スリランカの紅茶事情だけでなく、現地の人々と交流することでスリランカの文化や生活を知ることができ、とても得難い貴重な体験でした。参加してよかったです。

私は昨年ボランティアでスリランカの人に日本語を教えた事がきっかけで、スリランカってどんな国なんだろう、行ってみたいと思うようになりました。そんな時にパルシックオンラインショップで注文したアールグレイ紅茶と一緒にスリランカボランティアツアーのチラシが入っているのを見つけ、夫婦で参加を決めました。一般的なツアーだと現地の人と触れ合える機会はほとんどありませんが、このボランティアツアーでは紅茶農家さんのお宅にホームステイできるのが魅力でした。

ただ、申し込んでから、便利な生活に慣れた日本人にはスリランカはサバイバル（デング熱、トイレ、水シャワー、村ではネット使えない）のような旅行になりそうだと思いはじめ、かなり心配になりました。そこで万全の準備をして行ったところ、デニヤヤは山間部で夜はかなり寒く、そのうえ滞在先には蚊帳もあったので、蚊に刺されることはありませんでした。また、トイレットペーパーや水のペットボトルの用意、お湯の出るお宅、パルシック事務所でのネット接続など、案内していただいたロバーツさんには細かいところまで配慮をしていただき、とてもありがたかったです。行きの車の中で夫が腰を痛めたときは、ホームステイ先の一つでもあるアーユルヴェーダドクターを紹介してもらい、治療してもらうことができたので、とても助かりました。

都会のコロンボと違い、デニヤヤの緑豊かな自然や、様々な野鳥にはとても癒されました。特に野生の孔雀を見ることができたのは感激でした。訪問先やホームステイ宅の食事はどれも自宅の庭や畑の果物、野菜、ハーブを使って手間をかけた家庭料理で、とても美味しかったです。特に「若返りのハーブ」と呼ばれるゴトゥコラ（ツボクサ）のスープとサンボルはもう一度食べたい！と思っています。

私は農業は素人なので、あまりお手伝いにはなりませんでしたが、有機農業の大変さはよく分かりました。十分な農機具や用具がないにも関わらず、紅茶を有機栽培している農家さんたちには頭が下がります。有機農家さんたちとのミーティングでコストや手間がかかるけれど、期待したほど収入が増えないのが今の課題と伺い、健康と環境を守るという信念だけではモチベーションを保つのが難しいという現実も知りました。今後もフェアトレード有機紅茶を買うことで、有機に転換した紅茶農家を応援していきたいです。

帰国してから農薬のことを調べると、スリランカ政府が 2015 年に、発ガン性が指摘されているモンサント社（現バイエル）のグリホサート（除草剤ラウンドアップ）の使用を全面的に禁止していたことを知りました。以前は、農家の約４０万人が慢性腎臓病にかかり、毎年２万人が死亡していたそうです。

現地では見るもの聞くもの食べるものの全てが珍しく、農作業や有機紅茶農家グループ・エクサメンバーとの交流、シンハラージャ森林保護区での散策、ポヤデー（月一回の満月の日）のお参り、紅茶加工場見学、生物多様性の畑見学と様々な素晴らしい体験をさせていただきました。どれもよい思い出ですが、今回のツアーの一番の収穫は「人との出会い」ではないかと思っています。

エクサメンバー、農家さん、ホストファミリーと子供達、アーユルヴェーダドクター、ラジャさん（運転手）、ランジャンさん（バンガローオーナー）、ドクター・プアセナ（紅茶工場のオーナー）を含め、デニヤヤツアーで出会った皆さんはどなたも温かく親切で、本当にいろいろとお世話になりました。また、ツアーの参加メンバーも「大工の大将」「紅茶スペシャリスト」「農業女子」「国際協力経験者」とユニークで素敵な方ばかりだったので、色んな事を教えていただき、とても楽しかったです。

最後に、このツアーが実りあるものになったのは同行していただいたロバーツさん、シンハラ語が堪能な現地のインターン真以さんの入念な準備、きめ細やかな心遣い、臨機応変な対応のお陰です。本当にありがとうございました。

エクサメンバーやホストファミリーの子供達と仲良くなったので、またツアーに参加したいと考えていた矢先に、コロンボでテロが起こり心配しているところです。デニヤヤの人達は純粋でとても親切にしてくださったので、治安が安定したらまた是非訪れたいと思っています。

フェアトレードのビジネスモデルを体感

三宅麻美

デニヤヤでの夜、生きものたちの鳴き声、山間に満月が沈む早朝の景色が目に焼き付いています。一生忘れない画だなと思いながらしばらく眺めていました。そして、「あぁ、来てよかった」、旅の大半をそう思いながら過ごしていました。デニヤヤの部屋で菊花線香を焚きすぎて喉がやられた以外（咳が止まらなくなります。以降参加されるみなさまご注意あれ（笑））、残念なことなどひとつもなく、本当に穏やかで充実した時間を過ごさせていただきました。

感想的には、大きく３つ。

①　直にデニヤヤの農家さんの言葉をお聞きできたことで、これまで続けてきたことをこれからも続けていこうと、確信を深められた

②　茶畑に入り、土に触れ、汗をかく作業にただ夢中になる。乾いた畑の土埃にまみれながら、草取りの感覚、これこれ、これなのと、心身の解放を実感しながら体を動かすことができ、少々弱った私の体もまだやれるのではないかと自信がもてた

③　かつてやってみたいと思ったけれど実際選択することのなかった経験を重ねてこられた方々と旅をご一緒でき、経験と経験が交わることで人生は豊かになるのだと妙に腑に落ち、自分のこれまでとこれからがありのままに手元に収まった感じがした

そんな学びなおしと再確認の旅になりました。

普通の会社員を続けている私は、生活の中で人や環境への負の側面をできるだけ少なくしたい、そんな思いから、忙殺されがちな日々の中でもできることを細々と続けてきました。特に消費の面では作り手に思いを馳せること、自分の基準で選ぶこと、自分の代わりに活動をしてくれる団体を応援すること、などです。今回、デニヤヤの農家さんからお聞きした「有機に転換しても収入が増えなければ仲間を増やすことは難しい」というとても現実的な生の訴えに、日本で暮らす私はパルシックの紅茶を飲むことや会員であることを続けようと改めて確信したのでした。加えて、広めること、ですね。お土産でお渡ししたルフナ紅茶を気に入って、購入してくれた方もあります。ルフナ紅茶はしっかりしているのでコーヒー好きの方にはストレートで濃いめに出して飲むとおいしく感じるそうで、そういう広め方もあるかもしれません。

昨今、ＳＤＧｓが広まってきて、企業や自治体でも「フェアトレード」が知られてくるようになりました。本質的には企業活動のサプライチェーンがきちんとフェアになることが目標ですが、まずはパルシックさん等の「フェアトレード商品」との関わりからはじめ、「フェアトレード」というビジネスモデルから学んで広がっていくといいなぁと思っています。

最後に、今回の旅を企画・運営してくださった日本・スリランカのスタッフのみなさま、ご一緒させていただいたお仲間のみなさま、スリランカで出会ったすべてのみなさまに感謝いたします。ありがとうございました。そして、この度のテロ後のスリランカに一日でも早く平穏な日々が戻ることを祈っています。

持続可能な紅茶づくりを考えるツアーに参加して

元持　幸子

今回のスタディーツアーより持ち帰った紅茶を丁寧に入れ味わいながら、スリランカでの貴重な経験や出会った人々の笑顔を思い起こしています。私が朝や休憩時間に飲んでいるカップ一杯の紅茶は、自然を相手に、多くの人たちの手をかけて生産していること、時の流れ（時代や世論）にも大きく影響を受けていることなど、実際に農園や加工場へ足を運び、話を聞き、肌で感じ考える機会となりました。

ツアーでの素晴らしい経験の一つは、ホームステイを受け入れていただいたデニヤヤの家庭の皆さんとの時間でした。どの家庭もあたたかく受け入れてくださいました。滞在中は、家族との何気ない時間をいっしょに楽しく過ごし、ポヤ（仏教の行事）への参加、料理教室などスリランカの暮らしの文化、ひとの良さや気質を感じました。

さらに貴重な経験としては、デニヤヤの小規模茶園を訪問、茶摘みや草引きなどを体験し、農家の皆さんにお会いできたことです。有機農業への取り組みへの転換や始めることへのリスクや作業量の増加などをリアルに感じ取ることができました。私自身、地域全体の理解は不十分ですが、紅茶の生産には様々な課題や市場とのギャップなど個人としては解決することが難しい現実課題へ目を向ける機会となりました。その中でも、デニヤヤの皆さんは、互いに助け合いながらチャレンジを続けていく強さと、紅茶への誇りを持ち合わせているようにも感じました。スリランカ空港やホテルでも紅茶を「ブラックティー」ではなく、「セイロンティー」と呼び、スリランカの紅茶への誇りを感じました。

スリランカの名前に由来している「serendipity セレンディピティ」という言葉が私の頭をよぎりました。セレンディピティとは「幸運な偶然を手に入れる力」という意味。(18 世紀イギリス作家 Thomas Walpole)「予測していなかった偶然によってもたらされた幸運」あるいは「幸運な偶然を手に入れる力」を意味します。今回訪問したデニヤヤ地域には、地形的にも恵まれた自然やこれまで積み重ねてきた紅茶栽培の技術、人々の助け合う関係など多くの物や力を持ち合わせていると感じます。それらを大切に守っていくこともあわせて、今後のエクサの活動展開を期待しています。私としては、日々いただくカップに注がれた紅茶と世界がつながっていることを忘れずに、日本から私や私達ができる事を考えていきたいと思います。

企画運営していただいたスリランカでお会いした皆さん、PARCIC の皆さんに感謝申し上げます。ツアーの学びにスパイスを加え、共に学びあうことのできる素晴らしい参加メンバーにも出会えました。数年後に、植樹した苗木の成長を見守るツアー（仮）に、ご一緒できればうれしいです。